

郡頭神社の絵金と協働教育

野角 孝一、中村 るい、松島 朝秀、吉岡 一洋 (高知大学)
中谷 有里 (高知県立美術館)

“Ekin” Picture Screens at Kourizu Shrine and Collaborative Education

Kouichi Nozumi, Rui Nakamura, Tomohide Matsushima, Kazuhiro Yoshioka,

(Kochi University)

Yuri Nakatani

(The Museum of Art, Kochi)

要 約

本研究は、高知大学において日本画・美術理論・保存科学・デザインを担当する教員と、高知県立美術館の学芸員（日本美術史）が高知市鴨部「郡頭神社」の絵金調査を行い、地域との交流を目的とした協働教育の在り方を探るものである。その協働教育とは「地域の芸術文化振興」「持続可能な地域デザインの可能性を探求する」これらの点をふまえて実践することを目的としている。本稿では、高知県における芸術文化のひとつである絵金を研究対象とする。異なる立場の研究者が総合的に調査・研究を実施するものである。

加えて、高知県立美術館で開催された「もうひとつの絵金－芝居絵屏風をめぐる土佐の文化－」（展覧会）に込められたメッセージや地域との関連性について言及し、芸術文化を軸にした地域との協働を、高知大学共通教育科目「美術を学ぶ」ⁱ（地域関連科目）履修者20名及び、高知大学地域協働学部（以下、地域協働学部と記す）の自主ゼミⁱⁱ10名による教育実践を、実践の記録と合わせて考察するものである。

キーワード：日本画、絵金、美術史、保存科学、協働教育、地域芸術、地域デザイン

1. 研究の目的

絵金とは幕末から明治期にかけて高知県で活躍した絵師・弘瀬金蔵（1812-1876）のことである。土佐藩の御用絵師であったが、雁作事件により城下を離れ、町絵師として生きたとされている。（現在では贋作事件はなかったとする説もある。）高知では「絵金」「絵金さん」という言葉で親しまれている。絵画のテーマは芝居絵屏風といわれ、歌舞伎や浄瑠璃のシーンを描写しているものが多い。血生臭いシーンも多くある。作品は絵師・金蔵だけでなくその弟子たちも描いた作品も含め、総称して絵金と呼ばれる。絵金に関する先行研究は高知県香南市の絵金蔵及び高知県立美術館に作品・資料が多数残っている。本研究はそれらに依拠しつつ、郡頭神社の絵金に焦点を絞込み、大学や美術館が協働して地域の文化振興の在り方を提案することを目的としている。

高知県は人口に占める神社の数が全国1位である。そのことは高知の産業に起因している。高知県の主要産業は第1次産業が主であり、林業、漁業の従事者が多い。加えて、古来より、台風の通り道であり、自然災害の多い地域であったことは、自然への畏敬の念のようなものを県民意識に抱かせることとなった。それは神社において神様に五穀豊穡を祈願するような風習に深く根付いたと推察できる。

文化とは地域で暮らす人々の生活の中から作られる。先人から引き継いだ様々な形の文化遺産を保全・活用し、次世代にどのようにバトンタッチするのか、新たな文化創造のための場を作るべきである。本研究は、地域における協働教育の場をサービスマーケティングによって創造し、絵金と祭礼の関係を神事に参加することで、住民へのヒアリング調査を行う。普遍的な人の豊かさを再考し、文化の多様さを学び、地域理解力、問題解決力を身に付け、地域に育まれる文化を改めて見識する手掛かりとしたい。大学の授業と美術館が連携した教育実践、或いはゼミと地域が連携した教育実践は、研究との往還により、協働教育を深化することができる。

また、論考を進めるにあたって、美術に関する様々な学識を有する大学教員と美術館学芸員が実践に加わることで体系的な絵金研究を促進することができる。

2. 調査対象地域である郡頭神社について

本論で調査対象とした郡頭神社の由緒について概観する。御鎮座地は高知市鴨部264番地で、郡頭神社は「こほりづ」と読む。御祭神は大国主神である。延喜式内社であり、明治5年には郷社に列し、昭和21年神社制度の改革により神社本庁に所属している。昭和56年5月27日、御社殿及び社務所が炎上したが、御神体間近まで燃え迫ったが、火は自然に消え、御神体は安泰であった。氏子は高知市の鴨部上町地区から旭町まで広がっており、高知市の西部エリアが中心となっている。また郡頭神社は地理的には高知市の中心を流れる鏡川の河川沿いで、路面電車と道路が一車線に混在しており、交通ルールの分かりにくい道路が通っている。

毎年7月21日には夏祭りが開催され、8枚の芝居絵と4枚の笑い絵が絵馬台に設置され、夏祭りに参拝する参拝客が鑑賞している。しかし、氏子や地域の高齢化により、夏祭り・輪抜け様といった神事の運営が困難になっていることがわかった。また、絵馬台の設置・撤収は3日かけて行っている。

鴨部地区の民生委員を務める方からの要請と高知大学の絵金研究チームが研究・教育の両面から協働できるという点で両者のニーズが合致したところから郡頭神社の神事・絵金に関与することとなった。

3. 芝居絵屏風と絵馬台の現状について

郡頭神社では前述のように8枚の芝居絵屏風と4枚の笑い絵が所蔵されている。それらの作品は昭和56年の火災の教訓もあり、ブリキ製の箱に入れられ、湿気を配慮し、倉庫内の約2mの高さの位置に保管されている。ブリキの箱には昭和56年の火災時に一部消失した「東山桜荘子 佐倉宗吾拷問」がそのまま保管されている。そのため現在絵馬台に設置されているのは模写である。

郡頭神社では高知市内にある朝倉神社などと同様に絵金らの作とされる芝居絵屏風は絵馬台に設置される。絵馬台は【図1】のように数メートルの高さのある絵馬台を人力で組み立てて作られる。その制作方法は口伝のみで、「北 左 三」のように材料となる木材に書かれた印を頼りに、氏子や地域の方々がこれまでの経験を思い出しながら組み立てられる。手すりもない中で、身を乗り出して重い木材を組み立てる場面も多々あり、実際に昨



【図1】 絵馬台の制作風景
(平成29年7月20日撮影)

年は事故があり、転落して負傷者も出ている。本研究では教員や学生が櫓の制作に参加したが、それ以前は高齢者が多い中でこれらの作業が行われており、新たな後継者を一刻も早く育成しなければならぬ状況が見てとれた。しかし現実的には難しく、大学の介入はしばらく継続することが予想される。またその一方で、絵馬台の制作方法については口伝のみにする必然性はなく、今後の研究の中で設計図や組み立て方法については記録として残していくことを提案していき、郡頭神社における夏祭りの独自性そのものである芝居絵屏風と絵馬台を継続して設置するための一助とした。 (野角孝一・松島朝秀)

4. 「もうひとつの絵金」展について—「絵金」を美術館で展示するという事

2017年3月30日～6月11日にかけて、高知県立美術館では「もうひとつの絵金—芝居絵屏風をめぐる土佐の文化—」展（以下、本展）を開催した。本展の趣旨は、極彩色の芝居絵屏風の強烈なイメージで最もその名を知られる絵金について、既存の絵金イメージを超えて「作品の形態」「作者」「作品をとりまく環境」などをテーマに多角的な切り口から紹介することにあった。

「絵金」は一人の絵師の名前であるが、地域の祭礼文化と切り離せない、高知の一部地域の文化そのものを象徴する名詞でもある。本来、絵金を美術館の展示室に並べることは、祭りの現場から絵金を切り離し、その存在の前提を展覧会の鑑賞者に見失わせる可能性をはらむ。もちろん展覧会では祭礼文化の文脈を伝えるために、照明の工夫や解説パネルの設置、ギャラリートークなどによる文脈の補足を行ったが、展示室内で実際の地域の祭りの持つ空気が大きく削ぎ落されてしまうのは避け難いことだ。

それでは美術館は単なる地域の文脈の剝奪者なのだろうか。以下では、本展を通じて見えてきた取返して美術館で絵金を展示することの意義について考える。

美術館の展示室は現実離れした特異な空間である。ここでは高知県内の本来異なる地域に点在していた芝居絵屏風を同時に展示することも、絵金と絵金ではない画家を一堂に並べることもできる。これらは祭りの現場にはともに並びえなかったものたちだ。やり方によっては本来のあり方を歪める危険をはらむが、一方でこの非現実的な場所で初めて並ぶもの同士を比較できることで明らかになることや気づきも存在する。

例えば今回の展示では、絵金の狩野派の師である前村洞和や同時代の土佐の絵師、河田小龍の作品を絵金派の芝居絵屏風とともに一堂に展示した。狩野派の絵師としての洞和の優美さは、土着の祭礼文化の中で生まれた芝居絵屏風を描いた絵金のイメージと、大きな隔たりがあることが一目でわかる。河田小龍の芝居絵屏風には、絵金や絵金派とは全く異なるこの絵師の個性がはっきりと表れていた。また本展は企画展「これぞ暁斎！ ゴールドマン・コレクション」展と同時期に開催できるように企画した。「これぞ暁斎！」展で紹介した絵師、河鍋暁斎は絵金と同じく前村洞和に師事した経歴を持つ幕末から維新期に活躍した絵師であり、狩野派と浮世絵を融合した画風や、笑い絵の主題選択など、絵金と共通する点を多く持っている。両者を比較することは絵金の生きた時代を巨視的に眺めるのを助けたであろうし、それ故に絵金の土着性も改めて認識されたことだろう。両者を同じ館内で比べられる仕組みも、美術館という施設ならではのことであったはずだ。

また美術館に作品を入れることで、忘却と消失を免れた文化もある。本展では平成28年度に高知県南国市の札場地区町内会より当館に寄贈された芝居絵屏風を修復した上で展示し、修復作業を通じて明らかになった地元の人々が絵に残した痕跡についても紹介した。絵金の作品が絵画であるだけでなく、地元の人々の手で伝えられてきた文化そのものであるということを、美術館ならではの方法で記録し、発信することができた事例である。

今回の取り組みを通じて地域の文脈からやむなく切り離され作品を、美術館ならではの方法で再

度来るべき場所に繋ぐことは大いに可能だと信じる。またそのような工夫と努力が今後も求められるだろう。(中谷有里)

5. 共通教育「美術を学ぶ」における教育実践

高知大学の共通教育で、地域関連科目としての「美術を学ぶ」の授業は、今年で3年目となる。この授業では、高知県立美術館と連携して、県立美術館のコレクションに触れ、また、美術理論の立場から、作品の基本的な見方を身につけることを目標にしている。

内容としては、県立美術館で見学会を実施し、見学した作品の一つを、口頭発表することを課した。口頭発表といっても、10分以内の短い発表で、作品について言葉で表現すること、換言すると、作品の記述（ディスクリプション）が中心のごく基本的なプレゼンテーションである。2017年度前期のシラバスは以下の通りである。

4/14 (金)	第1回	オリエンテーション：美術とは（色と形の役割）
4/21 (金)	第2回	美術の流れ：古代～近代
4/28 (金)	第3回	美術の見方（1）
5/12 (金)	第4回	美術の見方（2）
5/19 (金)		（第5回 振り替え）
5/26 (金)	第6回	高知県立美術館のコレクションについて（学芸員の出張講義）
6/ 2 (金)	第7回	高知県立美術館 「絵金特集：もう一つの絵金」及び「暁斎展」の見学
6/ 9 (金)	第8回	美術の見方（3）
6/16 (金)	第9回	美術の見方（4）
6/23 (金)	第10回	ミニ口頭発表（1）
6/30 (金)	第11回	ミニ口頭発表（2）
7/ 7 (金)	第12回	ミニ口頭発表（3）
7/14 (金)	第13回	ミニ口頭発表（4）
7/21 (金)	第14回	ミニ口頭発表（5）
7/28 (金)	第15回	まとめ

この授業は、美術鑑賞の入門という位置づけで、はじめに主題や様式など、美術を学ぶ際の基礎を取り上げた。第6回の授業で、県立美術館の学芸員中谷有里氏に県立美術館のコレクション形成の経緯及び、現在展示中の特別展と常設展の見どころを出張講義していただいた。美術館の使命と、展示を行う場合の作品保存のための配慮（照明によるダメージを最小限に抑えること等）、及び、空間構成の工夫ほか、美術館の現場で日々、奮闘している学芸員の声を直接聞くことができ、とても有意義な授業であった。

次の第7回の授業は、美術館に出向き、「絵金特集」および特別展「暁斎展」を皆で見学した。中谷氏の解説で、土佐の夏祭りで使われた絵金提灯12基と、絵金派屏風を鑑賞、さらに絵金と同じ幕末維新期の暁斎の作品鑑賞を行い、意見



【図2】絵金派芝居絵屏風の前で、中谷氏による解説（2017年6月2日撮影）

を交換しながら、参加型の鑑賞授業を実践した。

第10回以降の口頭発表では、作品について文献などで調べ、知識を着実に定着することができたと思う。

美術作品には、その作品に関わった人々の環境が詰まっており、美術館は地域の文化を保存する使命をもつことを、学生は授業と見学を通して肌で感じたようだ。今後も、大学と県立美術館とのこのような連携授業を開発していきたいと考えている。(中村るい)

6. 今後の研究課題：まとめ

地域社会とアートの関わりは90年代にパブリック・アートの隆盛にも起因して、公共空間にアートを配置する試みははじまり、今日では都市計画にアート・デザインの視点を取り入れることは常套手段となっている。また、地方都市で見られる芸術祭の類は芸術作品を消費文化の枠組みで捉え、地域資源や素材であるかのように芸術作品を位置づけて地域活性化・地域再生に取り組む例は珍しくない。国も地方自治体も文化行政において、芸術文化を経済や社会の枠組みで推し量ろうとする、社会の役に立つのか立たないのかというロジックでアートを他のイベント・事業と同じであるかのように評価するところに疑問を感じている。ただ、アートは崇高であり、客寄せパンダであってはならないというわけでもない、行政は大衆の鏡であり敵対する必要は無く、芸術と行政の交流が文化促進の一助になり、アーティストが作品に込める個人的なメッセージも世相や地域社会に対する主張を帯びていることを知ることができる。昨今では地域へのコミットを高めようとするアーティストも増えてきている。

藤田(2017)はウィリアム・モリスの発言を用いて以下のように描写している「真の豊かさは二つあり、ひとつは衣食住であり、もうひとつは芸術と知識の豊かさである。」と、国家が近代化していく過程でこの考え方が、持続可能なコミュニティの形成や豊かさとは何かを考える上で重要となるだろう。本稿で述べてきたように、絵金作の芝居絵屏風を用いた祭礼の担い手は高齢者ばかりである。年に一度の祭礼を継続させるには、学生の介入によって、地域の若者がより祭礼から離れていく危惧もあり、新しい担い手の育成も積極的に行って行かなくてはならない。一度途切れた祭礼を復活されるのは困難であり、今後も祭礼を継続させるためには一度でも絶やしてはならない。そのため学生の積極的な介入は必須であるが、地域の次の担い手を育成できるまでの一時的な措置であるという認識を忘れてはならない。

その一方で本稿での教育実践は、文部科学省のいう地方創生推進事業(COC+)とも合致している。大学が地域を志向した教育・研究・社会貢献を行い、地方自治体や企業、地域のステークホルダーと協働する実例は、地域との連携強化を推進する好例であるといえるのではないかと考えられる。

また、本稿とは別であるが、延長線上に、平成29年10月より郡頭神社では、「編集委員会」(絵金保存会と高知大学が主となり)が発足し、奉納された絵金派の作品について学術的な記録をまとめようという動きがある。委員には絵金保存会を中心に神社責任委員、高知大学、絵金蔵、高知県立美術館、アクトランドなどから有志が集い、資料提供・執筆、氏子のヒアリングをまとめるという活動が行われており、郡頭神社の芝居絵屏風のみならず高知県全体の絵金や芝居絵屏風を活用した夏祭りの発展に寄与したい。

本研究は、地域文化の活性化に資する絵画の復元研究－絵金「芝居絵屏風」の想定復元制作を通して(基盤研究C)、地域文化における絵画の役割－絵金作 芝居絵屏風が土佐の祭礼に享受された根拠の証明(基盤研究C)による成果である。

参考文献

- 1、『高知新聞』2017年1月31日朝刊、社会2「絵金屏風の風景1 保護と活用のはざままで」
- 2、由緒書『かもべの大国様郡頭神社』郡頭神社社務所
- 3、藤田治彦「デザインの哲学～豊かさを再考する」『日本デザイン学会誌』第24巻2号（2017）pp. 32-33

注

-
- ⁱ 「美術を学ぶ」高知大学共通教育（教養科目・人文分野・地域関連科目）として開講されており、授業では、美術理論の立場から作品鑑賞の方法論を学び、また「絵金特集：もうひとつの絵金—芝居絵屏風をめぐる土佐の文化—2017年4月22日[土]～6月4日[日]（高知県立美術館）」を鑑賞した。
 - ⁱⁱ 「自主ゼミ」とは、高知大学地域協働学部の石筒覚と吉岡一洋による合同ゼミであり、ゼミ生は全員が地域協働学部の2年生である。地域の諸課題について様々なアプローチから協働教育を実践しており、本稿では郡頭神社でのサービ斯拉ーニング（正課外活動として実施）の現状を学術的にまとめる。